

兵主大社（野州市）の祭神は八千矛神（八大国主神）です。もともと兵主神とは、中国の史書に見える「軍の神」ですが、同時に「水の神」「農耕神」との見方もあります。また、その名称からか、古来、源頼朝を始めとする武家の篤い信仰を集めてきた神社でもあります。

兵主大社には、さまざまな起源が伝えられています。ある起源では、兵主の神は、景行天皇の時代に、奈良の穴師に祀られていたものが、天皇が近江国高穴師穗宮に遷都するに当たり、穴太（現大津市）に遷座しましたが、時を経て欽明天皇の時代、琵琶湖を渡り、現在の社地に再び遷座したと伝えています。

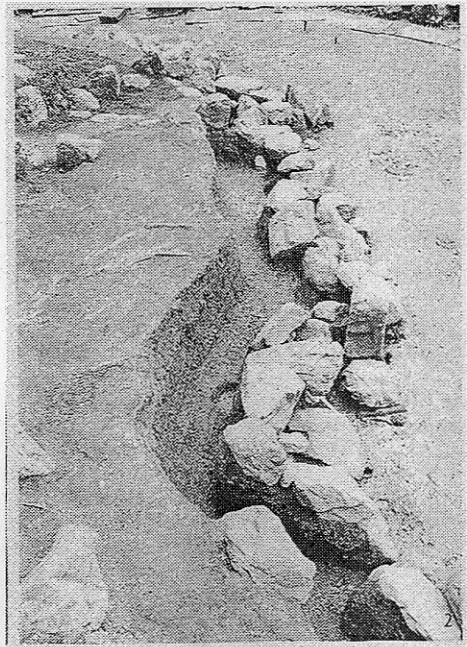
また、別の起源では、養老2年（718）に兵主神は、大亀の甲に白蛇に姿を変えて乗り、鹿の群れに護られながら琵琶湖を渡り、現在の社地に着いたと伝えています。いずれにしても、兵主神は対岸

の地から琵琶湖を渡ってきた神であることは、2つの縁起とも共通しており、兵主の神が琵琶湖と深いかわりがあることを暗示しています。

さて、現在、本殿の南に美しい庭園が広がっています。この庭園は、対岸の比良山地に産する守山石と呼ばれる庭石をふんだんに使った大規模な地景回遊式庭園で、鎌倉時代の古様を伝える庭園として、昭和28年に名勝に指定されたものです。

平成4年、庭園を修理するため、発掘調査が行われました。その結果、全く予期せぬことに、現在の庭園の下層から、現状とほぼ同じ形状で、洲浜で縁取られた平安時代後期の池庭が現れたのです。さらに発掘調査を進めると、こ

兵主大社



兵主大社の庭園跡（野州市教委提供）

の池に水を注ぐ160mにもおよぶ遣り水の跡が、さらには、琵琶湖に向かって出入りするための船着きの跡までもが見つかりました。起源と伝えられる鎌倉時代よりもさらに古い庭園が蘇ったのです。下層から現れた庭園の特徴は、長大な流れと、洲浜に縁取られた池にあります。また、庭園の全体が発掘されたわけではないので、想像の域を出ないのですが、流れは、長方形に閉じていた可能性があります。すなわち、水で囲

まれた聖なる場所があり、ここに、兵主神が祀られていたかも知れないのです。また、通常、洲浜の造形は海岸の情景を表すとされています。しかし、兵主神が琵琶湖に示現したという起源を想えば、この洲浜は海辺ではなく湖辺、すなわち、琵琶湖を表現したものと考えることが自然ではないでしょうか。

園は、まず、洲浜を廻らし、島を浮かべた池庭が造られ、その後、流れの庭に改造していることがわかりました。流れは当然川の水であり淡水です。とするならば、洲浜が廻る池も、海の造形ではなく、湖の造形であり、浮かぶ小島は竹生島を意識したのかもかもしれません。近江の最古級の庭園の何れもが、琵琶湖を意識した可能性のあることは、誠に興味深いことです。

さて、兵主大社には、琵琶湖とのかかわりを暗示させる、「八ヶ崎神事」と呼ばれる神事が伝えられています。これは、晩秋のころに、兵主神が示現したと伝えられている野州市菖蒲の湖岸で奉祀されるもので、宮司が大社の御神体とともに湖中に入り、ご神体を琵琶湖の水に浸す神事です。詳しい意味はわかりませんが、兵主の神が琵琶湖に

関係する神であるとすれば、1年間社殿にあり、里と里人を護り、力が衰えた神に、琵琶湖の力を注ぎ込むための祀りのように思えてなりません。

予期せぬ平安時代の庭園出土

（財団法人滋賀県文化財保護協会 大沼芳幸）